図書館に対する視線の多様性　フィクションの中の図書館に関する最近の事例

日本語日本文化学科　教授
佐藤　毅彦

１．はじめに
２．大崎梢『27000 冊ガーデン』
３．名取佐和子『図書室のはこぶね』
４．森谷明子『星合う夜の失せもの探し　秋葉図書館の四季』
５．櫻井とりお『虹いろ図書館　半分司書のぼくと友だち』
６．原田ひ香『図書館のお夜食』
７．おわりに

１．はじめに

日本児童文学者協会が編集・発行する、隔月刊誌『日本児童文学』2023 年 7・8 月号は、「特集　いま、図書館を訪ねて」を掲載している。1)

はじめに、詩、俳句、短編小説、などの図書館をテーマにした創作作品が紹介されており、『晴れた日は図書館へいこう』シリーズ 2)の著者・緑川聖司による短編小説『本の森の感想文』（pp.12-17）が掲載されている。そのあとにつづく「論考」では、それぞれ海外と日本の児童文学作品をとりあげ、図書館の描かれ方について、論じている。

また、一般財団法人日本青年館「社会教育」編集部・発行の月刊誌『社会教育』2023 年 11 月号は、「特集：読書の秋、図書館の秋　知の基盤の読書と図書館の役割をさぐる」を掲載している。3)

巻頭では、編集部のコメントとして、これまでの経過についてふれたのち、「デジタル化が進行するなか、これからの生涯学習・社会教育はどのように変容していくのでしょうか。『学びの環境』『学びの方法』がどうなっていくでしょうか」「地域には『多様なコミュニティ、家庭、図書館/文書館、博物館、公民館、生涯学習センター、学校、大学、企業、行政』などが存在しています」「本号では、多様な『学びあい』『支えあい』による『コミュニティを元気にする』ことを様々な視点から考えていきたいと思います」（p.1）と述べられている。特集記事の中で、たとえば、日本図書館情報学会の会員でもある、青山学院の野末教授は、「今後の図書館がとるべき方向性」について、「『図書館ならでは』の活動（支援）を進めていくこと」が求められ、それは「資料などの情報資源、パソコンなどの物的資源、各スペースなどの空間資源、図書館員をはじめとする人的資源を連動的・有機的に活用すること」である、としている。

同じ「社会教育」分野の専門雑誌である『月刊　社会教育』では、2021 年 10 月号で、「特集　新しい図書館の可能性」を掲載しており、図書館条例の悉皆調査や、新型コロナウイルスに対する公共図書館の対応調査、などの結果を分析している。4)そのあとに、掲載された特集記事の中で、たとえば、「塩尻市立図書館」が入っている、複合施設「えんぱーく（塩尻市市民交流センター）」の開設に大きな役割を果たし、現在は、松本大学教授である伊東直登は、図書館のイメージは「本を借りたり読んだりする所」であり、「えんぱーく」の開設にあたっては、「機能融合」という言葉により「施設内のさまざまな活動をつなぎ、新施設全体がひとつの行政サービス体となることを目指そうとした」(pp.30-31) と述べている。

さらに、図書館と関連する領域である博物館の学芸員については、さまざまな角度から扱った資料がこれまでに刊行されてきたが、ｗｅｂで公開された、動物のキャラクターが登場する四コマ漫画と、それに付随するコメントを再構成した、滝登くらげ『学芸員の観察日記　ミュージアムのうらがわ』は、ユニークなキャラクターとコメントの内容が話題となった。5)表紙カバーには「学芸員は、どこで何をしているのでしょうか？この本では、そんな謎に満ちた学芸員の生態に迫ります」と記述され、本文は、四コマ漫画と「くらげのひとこと」というタイトルの 100 字程度のコメントで構成されている。博物館での日常的な業務や学芸員の活動内容が広く扱われているが、「学芸員資格」(p.150)、「博物館実習」(p.152)、「求職活動」(p.154)、などにふれている部分もある。巻末には、「学芸員になりたい」というページ(pp.170-171)があり、就職状況について、「学芸員は正規職員だと思われがちですが、実は、不安定な立場の人もたくさんいます」。「財政難などから正規職員でない学芸員を雇う博物館が、残念ながらたくさんあります」。「学芸員に限ったことではなく、小中高の先生や、大学教員、図書館の司書、保育士、介護福祉士、などなど、専門的なスキルが必要とされるさまざまな職種で、いま起こっていることです」と記述されている。

図書館の周辺領域である、児童文学や社会教育の関係雑誌で、図書館に関する特集が組まれていることは、こうした分野でも図書館に対する一定の関心が存在していることを示しているといえよう。また、同じ社会教育関連施設である、博物館について、その職員である学芸員の日常業務に焦点をあてた四コマ漫画とコメントで構成されている単行本が刊行されて、一定の読者を獲得しており、この領域での就職事情について、図書館と同様に厳しい状況がある事実を、広く紹介することにつながっている。

図書館や図書館に勤務する人物がストーリーに登場するフィクションの作品については、図書館の勤務経験がある作者が執筆したものや、図書館関係者に様々な形で取材を敢行し、現実の図書館状況をある程度反映している作品も、一定数、発表されてきている。メディア状況の変化やコロナウイルスの影響などもあり、図書館の現場のあり方が多様化する一方で、今回は、それらの中で、図書館・図書館員がどのような視線で見られているのか、近年の事例について、検討した。

注)

1)「特集　いま、図書館を訪ねて」『日本児童文学』日本児童文学者協会、2023.7-8
　創作作品以外では、以下の文章が掲載されている。
　内川朗子「論考　図書館を描いた日本文学を考える」pp.24-31
　笹岡智子「論考　海外の児童書で出会う図書館と図書館員たち」pp.32-39
　今関信子「コラム　市民を活かす、市民が生きる図書館」p.40
　はらまさかず「見える人も見えない人も、同じ絵本を楽しめるように」p.41
　奥山恵「コラム　『広島市子ども図書館』訪問記」p.42
　汐﨑順子「コラム　『子どもの読書を考える事典』を刊行して」p.43
　「アンケート　いま図書館で」pp.44-50
　この後のページには、「図書館」を舞台にした掌編募集に対する、入選作・５編と、選考経過が、掲載されている。
　隔月刊誌『日本児童文学』は「日本児童文学者協会が編集、発行する児童文学総合誌」「内容は、児童文学の今日的な問題に様々に切り込む特集のほか、書き下ろしの短編と詩を毎号掲載」している。
https://jibunkyo.or.jp/about2/
　日本児童文学者協会は、「児童文学の作家、詩人、翻訳家、評論家などで構成されている文学運動団体」とされている。「1946 年に創立」「会員数は現在約 800 名」である。
https://jibunkyo.or.jp/about/
2)これまでに、以下の作品が刊行されている。
　緑川聖司『晴れた日は図書館へ行こう』2013、ポプラ社（ポプラ文庫ピュアフル）←ポプラ社、2003
　緑川聖司『晴れた日は図書館へ行こう　ここから始まる物語』2013、ポプラ社（ポプラ文庫ピュアフル）
　緑川聖司『晴れた日は図書館へ行こう　夢のかたち』2020、ポプラ社（ポプラ文庫ピュアフル）
　緑川聖司『晴れた日は図書館へ行こう　物語は終わらない』2023.11、ポプラ社（ポプラ文庫ピュアフル）
　最新刊の本書は、解説を、次章で扱う『27000 冊ガーデン』の著者、大崎梢、が執筆している。解説の冒頭では「本作の主人公は雲峰市内の小学校に通う女の子、茅野しおり。図書館が大好きで、晴れた日はもちろん、雨の日も雪の日もせっせと足を運ぶ。従妹の美弥子さんが司書として働いているので、本について何でも相談できる上に、しおりが遭遇する数々の出来事や不可思議な現象、気になる人物や言葉に、貴重な助言を授けてくれる」「謎に対して直接的な答えが差し伸べられることはなく、人々との関わりの中から、しおり自身が自分のペースで真相にたどり着く」（p.296）と紹介している。
3)「特集：読書の秋、図書館の秋　知の基盤の読書と図書館の役割をさぐる」『社会教育』一般財団法人日本青年館、2023.11

雑誌の判型から、次に紹介している『月刊　社会教育』と識別するため、（大判）『社会教育』と称されることもある。

特集の記事内容は、以下の通り。

野末俊比古・青山学院大学教育人間科学部教育学科教授「今月のことば　図書館サービスのモデルと AI/DX 時代の役割」pp.4-5

前田昇・NPO 本の学校副理事長「知の地域づくりを求めて　本の学校（鳥取県米子市）の 29 年間の歩み」pp.6-7

磯井純充・まちライブラリー提唱者「提言　『学びあいの居場所』まちライブラリー、マイクロ・ライブラリー」pp.8-11

前川道博・長野大学企業情報学部教授「論文　これからの社会教育　知識循環型生涯学習へのチェンジ」pp.12-19

長沖竜二・図書館総合展運営委員会事務局長「事例　タイパとコスパと図書館総合展」pp.20-21

武笠和夫・教育評論家「書評　最強の『学び』は『真似び』からはじまる　加来耕三著『徳川家康の勉強法』人生 100 年時代を健康で心豊かにより良く生きるヒント・生涯学習」pp.24-28

なお、同じ号に、

取材・いとう啓子（本誌編集部）「連載　社会教育をめぐる新たな動き　生涯学習の現場から第 19 回　川崎市立宮前図書館　図書館でシニア向けのセミナーを開催」pp.46-49

が、掲載されている。

『社会教育』日本青年館

https://social-edu.com/

4)「特集　新しい図書館の可能性」『月刊　社会教育』旬報社、2021.10

森いずみ・県立長野図書館長「かがり火　社会の営為・人類の叡智を未来へ」p.1

（雑誌の記述では「長野県立図書館」となっているが、同館のホームページでは「県立長野図書館」と表記されている）

https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/index.html

岡本真・アカデミックリソースガイド代表「全国の図書館条例調査からみえてきたこと」pp.3-9

常川真央・中央大学「公共図書館における新型コロナ感染症への対応」pp.10-17

佐久間貴士・福島県須賀川市経済環境部「図書館を核とした融合施設の挑戦　震災からの創造的復興を目指して」pp.18-22

原田貴子・熊取町立熊取図書館館長「熊取町図書館協議会答申（2019 年）の過程にみる図書館の可能性」pp.23-29

伊東直登・松本大学「地域に役立つ図書館づくりを考える　塩尻市立図書館の事例を中心に」pp.30-36

耳塚佳代・ジャーナリスト「情報格差をなくすニューヨーク公共図書館　誰もがアクセスできる図書館を」pp.37-39

土肥潤也・みんなの図書館さんかく「市民の参画を生み出すみんなの図書館さんかくの実践」pp.40-43

『月刊　社会教育』旬報社

https://www.junposha.com/search/g14595.html

5)滝登くらげ『学芸員の観察日記　ミュージアムのうらがわ』文学通信、2023.5

下記のｗｅｂページでは、著者による図書の紹介コメントが掲載されている。そこでは「書籍化にあたって、『仕事の紹介』に加えて」「『学芸員の置かれている状況』」について、「博物館で専門的な業務を担当する学芸員は、正職員だと思われがちですが、実は、有期雇用や非常勤など、不安定な立場で雇用されている人もたくさんいます」と、雇用形態にふれたことを述べている。

『ALL REVIEWS』

https://allreviews.jp/review/6053

２．大崎梢『27000 冊ガーデン』1)

大崎梢は、書店勤務の経験があり、初期の作品から、書店や出版・流通産業に関係のあるキャラクタを登場人物とする作品を、数多く発表してきた。図書館に関しては、公共図書館で移動図書館の業務を担当する職員に焦点をあてた、『本バスめぐりん。』『めぐりんと私。』がある。2)新たに刊行された、『27000 冊ガーデン』では、学校図書館に勤務する女性・星川駒子が主要な登場人物となっている。

駒子は、神奈川県内の戸代原高校（架空の名称）の図書館に勤務している学校司書である。「利用者の年代は高校生に限定されているので、ニーズに合わせられるかどうか。司書の力量は常に試される。やり甲斐もプレッシャーもある職場」とされる、この高校は「神奈川県北西部」に位置し「JR の駅から歩いて十分ほど」の場所にある。「駅前にはそれなりの商業施設があるものの、五分も歩けば畑が点在しているような土地柄」で、「校風ものんびりしている」。「生徒数は一学年二百四十人前後の七クラス。偏差値的には『中の上』で、成績上位者は名の知れた大学に進む。学習意欲は低くないだろうに、図書館の利用率は神奈川県全体でみても高くない」が、それは「開拓の余地があるということ」で、赴任から二年目、駒子は「利用者を増やしたい」（pp.7-8）と考えている。

◎学校図書館の担当者

小説の舞台となる学校図書館の担当者については、「一部の例外を除き、各校の図書館に司書はひとりしかいない。異動の辞令と共に新しい赴任先に移り、引き継ぎはあったとしてもごく短時間。その後はひとりでさまざまな業務をこなしていく。本の貸し出しや棚の

整理、発注作業はもちろん、着任校の教育方針を理解し、生徒や先生たちと信頼関係を築いていくのも大事な仕事だ。市中に設けられた公立図書館とは異なり、学校司書は教育課程の展開に寄与し、生徒の教養の育成に努めなくてはならない」（p.9）とあるが、この記述は、学校図書館法、第二条（定義）の条文「学校図書館とは」「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養の育成に努めることを目的として設けられる学校の設備をいう」をふまえたものと思われる。3)

◎学校司書としての活動

業務の内容については、「ほとんどの学校は司書の意見に耳を傾け、話し合いやら擦り合わせやら、協力体制を取ってより良い成果を目指していく」。（p. 19）「司書は学校にひとりきりなので、カウンターから離れるのは授業中にしているが、どうしても休み時間にいられないとき、あるいは研修会などの外出時は図書委員に協力してもらう」。「委員は各クラスに二人いて、主な活動は放課後のカウンター業務や棚の整理、清掃などだ。コーナー作りへの参加も積極的に呼びかけている。このあたりはどこの高校も同じだ」。（p. 22）「事務仕事をするための机や椅子、コピー機、各種キャビネットに加え、奥には洗面所もついている」。「別に書庫もあって、利用頻度が減った本を棚から下げて保存している。スペースに限りがあるのでいつまでも置いてはおけず、定期的に廃棄するのも仕事のうちだ。資料的価値を考慮しなくてはならないので、単純に古いものから処分するわけにはいかず、選別は常に悩ましい」。（p. 23）といったように、具体的な活動の状況や学校内での図書館スペースについて、説明されている。

学校図書館に固有の状況について「図書館は書店と異なり、同じ本をたくさん重ねて並べる展示ができない。公共図書館では予約件数の多い本を複数購入する場合があるが、待っている人たちに順次貸し出されていくので棚を温める暇はない。県立高校では基本的に一冊しか購入されない。その一冊一冊をテーマに応じて並べていくのが、学校図書館ならではのイベント台のディスプレイだ」（p. 68）などの点があげられ、業務として「司書として駒子も年に一回は蔵書点検を行っている。一冊ずつバーコードで読み取る作業もあるし、事務の先生も手伝ってくれるのだが、丸一日かかり腕も腰も痛くなる」。（p. 87）「書庫には基本的に貸し出しの減った本が保管されている。資料的価値を考慮して今後も保存される文集やアルバムもあれば、いずれ処分されていく本もある。基本的に生徒は立ち入らないが、蔵書整理の際に手伝ってもらうことも」ある（p. 102）といった対応をしていることが示されている。

資料費や図書の選択については、「現在、県立高校の図書館で本や雑誌（最近ではまとめて資料と呼ばれている）を買う場合、県から支給される公的予算は年間、三十万円弱だ。とてもまかないきれず、財源のほとんどは保護者から徴収する図書費に頼っている」。「月額二百円」で、「購入の検討には細心の注意を払う」。4)「学校なので基本的には生徒の育成を念頭に、先生からのリクエストも考慮して購入する本を決めている」。「いつも悩まし

く試行錯誤の連続だ」（p. 120）とされている。

移動図書館の職員にスポットを当てた『本バスめぐりん。』は、「種川市（架空の地名）」を舞台としていたが、執筆に際して、作者の大崎梢は、横浜市図書館を取材したことが紹介されていた。5)『27000 冊ガーデン』は、神奈川県の戸代原高校（架空の名称）を舞台としており、都道府県によって学校図書館の整備状況には差がある現状だが、「神奈川県では現在、県立高校の図書館に正規雇用の司書を配属している。非正規職員もいるが、全国的な割合からすると正規職員はかなり多い。どこも予算削減の荒波にもまれ、半数に近い学校が司書そのものを置いていないか、いても非常勤の身になっている」。「先々のことを思うと神奈川県の司書たちも楽観視できず、この体制を守っていくためにも日々の研鑽を怠らないのはもちろんのこと、学校司書活動の内容や成果を毎年きちんと公開してきている」。「県を八つのブロックに分け、各自で研究テーマを決めて具体的に取り組む」。「ごく一部の例外を除き、司書は各校にひとりしか配属されていないので、日々の業務の傍らデータを取ったり取材に行ったり発表形式にまとめたりするのは楽ではないが、孤軍奮闘の職場だからこそ、これまでの研究成果は現場で大いに役に立っている。他校の司書たちとの横の繋がりもありがたい」（p. 60）といったように、神奈川県での実態に即した設定となっている。6)

◎学校司書と学校図書館担当の先生

現実に、学校図書館の担当者として、学校図書館法で設定されている職種には、「司書教諭」と「学校司書」があるが、この小説では、「学校司書として配属されると、各校に図書館を担当する教員が置かれている。『司書教諭』と呼ばれるケースが多いが、正式な役職ではなくあくまでも担当だ。戸代原高校の場合は、数年前に担当していた教員が学期途中で務められなくなり、急遽、副校長が受け持ったらしい。以降それが継続されているが、教員たちの図書館利用については興味がないようだ」（p.118）とあるように、星川駒子は、「学校司書」の立場で勤務しており、一方で「司書教諭」という用語は、ほとんど使われておらず、「学校図書館担当の先生」などの表現が使用されている。

「この学校の図書館担当は副校長」（p. 30）で、「副校長の庄司先生」は、「何もなければ図書館に来ない人」である。「五十代の男性教師」「やや小柄の、ぼさぼさ眉毛が特徴的な人」（pp. 113-114）で、駒子が、学校図書館について「『図書館を利用してくださる先生はたくさんいらっしゃいます』」と言うと「『ほう。そんなにいるんですか』意外そうに言わないでほしい。仮にも図書館担当の教員なのに」（p. 117）と反応している場面があり、あまり存在感のあるようには描かれていない。

「購入する本を選んだり館の配置を換えたりも、司書はひとりで決めるので負担は小さくないけれど、難しいなりにやりがいがある。生徒とのかかわりあいも同様だ。自分なりの精一杯を尽くせばいいと割り切れる部分もある。問題は学校関係者との関わり方。思いのほか融通の利かない人、極端な人、ややこしい人、いい加減な人、無責任な人、口の軽

い人がどこの学校にもいるので気が抜けない。校内の力関係まで考えたら身動きが取れない。ふだんは関わり合いが少ないので、ある意味らくもしているが、何かあったときに頼れる存在はなかなか作れない」。(p. 30)「職員室で行われる教職員対象の打ち合わせに出席した。司書も保健室の先生も参加する」が、「職員室にも司書の机はあるが、ゆっくり座るのは朝の打ち合わせのときくらい」(p. 33) といった状況であることが説明されている。

実態として、ここで描かれている状況に近い小中学校や高校は、全国にある程度存在していると思われるが、学校図書館法で、「司書教諭」は、政令で定める規模以上のクラス数（現在は 12 学級以上）の学校では、「発令しなければならない」とされている。この小説の舞台となっている戸代原高校は、「生徒数は一学年二百四十人前後の七クラス」(p.8) という設定なので、「司書教諭」が発令されていなければ、法律に違反した状態ということになる。さらに、発令の対象者は、「司書教諭の講習を修了したものでなければならない」となっている。7)

◎学校司書としてのこれまでの活動

「駒子が学校司書になったのは七年半前、二十七歳の時だ。本を扱う仕事に憧れ大学で司書の資格を取り、卒業後は公共図書館でアルバイトをしながら正規職員を目指した。数少ない募集枠に挑戦し続け、神奈川県の採用試験に合格した」。(pp. 17-18) が、「同じ学校で『先生』と呼ばれる立場ながらも、教員と司書は管轄が異なる。たとえば神奈川県の県立高校の場合、所属が県の教育委員会というところは同じだが、司書は県立図書館で働く司書と同じ位置づけで『事務職員』だ」(p. 117) という設定である。

「最初の赴任先は、川崎市内にある工業高校」で「二年後に統廃合されることが決まっている学校で、駒子は経験値の低い新人なのに、長い歴史を持つ図書館を閉じる作業が課せられた」が、「決められた幕引きに向けて淡々と進むだけではなく」、生徒や先生に掛け合って、「企画をいくつもひねり出し」「受賞者をたたえ、関連図書を派手に展開した」。「終わりが見えていたから」「失敗を恐れず、繰り返し無茶ができた。喜怒哀楽の激しい二年間」のあと、次の高校に赴任する。(p. 18)

「ふたつめの赴任校」は「偏差値も知名度も高い都会の進学校で、図書館運営についても学校側で方針が決められていた。事細かく指導を受け、言われたとおりにしていれば波風は立たない。やる気や頑張りは、率直に言って嫌厭される。相手に合わせているうちに従順さが身に付き、静かな図書館でひっそり過ごし、丸四年で異動となった」。(p. 19)

その、「秋坂高校（架空の名称)」は、「横浜市内にある進学校」で「偏差値の高い学校」であり、「副校長や指導教諭といった管理部門の先生たちから、『当校の方針』をみっちり説かれた。方針とはつまり、学業優先に尽きる」。「司書になって三年目の気合を込めて、精一杯やれることはやりたいと自分なりに思った」が、「学校側は図書館に『勉強のはかどる自習室』を求めてい」て、「司書は管理人として日々環境を整え、生徒たちを一歩引いた場所から見守ってほしい」(p. 122) としていた。駒子は、「生徒の成長には勉強以外の要素

も必要ではないか」と思ったが、「学校側からはテーマを決めての展示や新刊を紹介するペーパーの作成などは、行わなくてもいいと言われ」「購入する本についても細かく指示を出され」た。(p. 123)

「学校の図書館は駒子に安らぎも喜びも夢も勇気も与えてくれた場所」で「自分を救ってくれたかけがえのない場所を守る側に回りたいと、駒子は学校司書を目指すようになった」。「どんな時代にも自分のような子どもはいるはずだ。たとえ有数の進学校であっても」「誰でも立ち寄れて、常にそこにあるということこそ重要だ」と考え、「控えめに細々と活動していると、二年目からは自分で選んだ本がじわじわと増えていった」。「進路や交友関係についての悩みを聞くこともあった。三年目の頃には自習以外で現れる生徒も増え、貸出件数も上昇した」。(pp. 124-125) 四年目に図書館担当の先生が変わり、現在の戸代原高校では、「担当は副校長」で、「ほぼノータッチで司書にお任せしますというスタンス」であるが、これは「ほとんどの高校がそう」で、「秋葉高校も」「学校の方針に合わせていれば放っておいてくれた」が、「新しく就いた担当の先生」によって、「図書館の運営はとても厳しく」なった。(p. 138)

この「三十代後半の英語の男性教員」である、「西沢先生」は、「限られた時間を無駄にせず、効率よく偏差値を上げていき、生徒の将来をしっかり切り拓く」という理念で、「非常に優秀で、厳しいだけでなく、努力している生徒には心を砕いてサポート」し、褒め上手で教え上手でもあった。「気さくで話しやすい面もあるのだろうが、好意的な表情が自分に向けられることは一度もなかった」。「胡散臭いものを見るような目をされ」「本棚に本を並べているだけなのに給料がもらえる楽な仕事」と言われたこともあり、「学校司書はそれに甘んじる厚かましくも図々しい人間と決めつけて」いるようなところがあった。「校内ですでに一目置かれる存在」で、なぜ図書館の担当になったのかとたずねると「押し付けられたと本人は言って」いた。「図書館をもっと静かで落ち着いた理想的な自習室にしたかったのか」「私語厳禁」と書かれた紙を、学校司書に作らせて、図書館に貼らせた、という。(pp. 139-140)

「リクエストされた本を購入し」貸し出したところ「勉強時間が著しく損なわれたと、保護者からクレーム」が来たり、「駒子が薦めた本を読んだ」生徒が、「学校を無断欠席し、小説の舞台である佐渡島」へ行ってしまう、ということもあり、駒子は、「保護者に謝罪」し、「反省文を書かされ」る。「図書館ではしばらくの間、勉強に関する本しか借りられなくなり、本を閲覧する机や椅子は使用不可になった」という。県の教育委員会に抗議文が提出され、翌年、駒子は異動になるが、それは救済策でもあった。(pp. 125-127) 駒子の後任には、五十代半ばくらいのベテランで、「司書としてのキャリアも長く、県立図書館に在籍していたこともあり新設校のオープンに腕を振るうこともしばしば」という人物が入り、教育委員会は事態を把握し「優秀なベテランを配し」た。(pp. 132-133) その後、秋葉高校の図書館担当教員が、学期途中にもかかわらず、西沢先生から、四十代の現国教師へと変更になったという。(pp. 161-162)

ストーリーをわかりやすく展開するためか、「秋葉高校」の「図書館担当の教員」である「西沢先生」は、かなり極端なキャラクタ設定になっている。現実に、これに近い状況の学校現場が存在するとも考えられるが、「司書教諭」をめぐる法的位置づけや発令に関する法的根拠などについて、作者がどのように把握していたのかは、示されていない。「学校図書館法」にある「司書教諭」ではなく「図書館担当の教員」という表現で、現実の状況とは異なり、あくまでもフィクションのストーリーであることを示唆している可能性もあるか。8)

注)

1) 大崎梢『27000 冊ガーデン』双葉社、2023.4

https://www.futabasha.co.jp/book/97845752462230000000

出版社のホームページでは、次のように紹介されている。

「星川駒子は県立高校の図書館に勤める学校司書だ。たまたま居合わせた出入りの書店員・針谷敬斗と共に、生徒が巻き込まれた事件の解決に一役買う。そんな二人のもとには、ディスプレイ荒らしや小口ずらり事件など、図書館や本にまつわる謎が次々と持ち込まれる!? 学校図書館を舞台にすべての本好きに贈る、心あたたまるミステリー。」

大崎梢 双葉社

https://www.futabasha.co.jp/search?author_name=%E5%A4%A7%E5%B4%8E%E6%A2%A2

単行本の出版社と同じ双葉社から刊行されている、『小説推理』2023 年 6 月号に掲載された、大矢博子による「ブックレビュー」では「高校の図書館を舞台にした作品は、ジャンルは違えどどれも郷愁めいた感慨を呼び起こす。書店や公営の図書館がいつでも利用できるのに対し、人生の中で限られた三年間だけの、宝の島のようなものだからかもしれない」としている。

大矢博子「ブックレビュー 『27000 冊ガーデン』」『小説推理』2023.6、p.123

2) 大崎梢『本バスめぐりん。』東京創元社、2016

大崎梢『めぐりんと私。』東京創元社、2021

大崎梢 東京創元社

https://www.tsogen.co.jp/sp/author/148

これらについては、以下で扱った。

佐藤毅彦「図書館の多様化とフィクションの中の図書館」『甲南国文』vol.64、2017.3、pp1-22

https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/64/hp/sato.pdf

佐藤毅彦「2021 年 コロナウイルスの拡散が継続する中での図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol.69、2022.3、pp.48-80

https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/69/sato2022.pdf

3)「学校図書館法」第二条（定義）

この法律において「学校図書館」とは、（中略）「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養の育成に努めることを目的として設けられる学校の設備をいう。」と、されている。

「学校図書館法」

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/011.htm

4) 月額 200 円とすると、12 か月で、「月額 200 円×12 か月＝2,400 円」が、「生徒一人当たり」の図書費の金額となる。この高校は「生徒数は一学年二百四十人前後の七クラス」(p.8) という設定なので、「2,400 円×240 人（7 クラス）×3 学年＝1,728,000 円」で、170 万円あまりが、保護者から徴収する、年間の図書費となる。

5) 佐藤毅彦「図書館の多様化とフィクションの中の図書館」『甲南国文』vol.64、2017.3、pp1-22

https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/64/hp/sato.pdf

上記の注)では、『本バスめぐりん。』について「連載の前に、横浜市立図書館にご協力いただきました。移動図書館・はまかぜ号を見せてもらったのです。中央図書館ではまかぜ号の出発を見守ったり、貸出業務が行われている巡回先にくっついて行った」(p.18) というように、執筆にあたって、移動図書館の現場に、取材を行ったことを紹介している。

6) 神奈川県には、「神奈川県内の学校図書館職員によって構成されている、県公認の研究団体」である「神奈川県学校図書館研究会」が存在する。

https://www.pen-kanagawa.ed.jp/kastanet/

7) 学校図書館法では、第五条で「学校には、学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かなければならない」とされ、第 2 号で「前項の司書教諭は、（中略）司書教諭の講習を修了した者でなければならない」としている。

この条文には、猶予規定があり、1997 年の学校図書館法改正以前は、「当分の間、置かないことができる」とされていた。現在は、政令で定める規模以上の学校には、「置かなければならない」が、その数未満のクラス数（現状では 12 学級未満）の学校では「当分の間、置かないことができる」とされている。

令和 2 年度の「学校図書館の現状に関する調査」（文部科学省地域学習推進課）では、公立高等学校について、「司書教諭」の発令状況は、全体で、86.2%、12 学級以上の学校に関しては、98.5%、となっている。一方、学校司書の配置については、公立高校で、66.4%、となっている。

令和 2 年度の「学校図書館の現状に関する調査」（文部科学省地域学習推進課）

結果について（概要）

https://www.mext.go.jp/content/20220124-mxt_chisui01-000016869-1.pdf

8) 学校図書館を扱った小説で、たとえば、竹内真『図書室のバシラドール』では、「ビブリオバトル」について、学校司書が司書教諭と打ち合わせをしているシーンや、授業での教員との連携を意識していることが描かれていることに、下記でふれた。

佐藤毅彦「2020年コロナウイルスと図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol.68、2021.3、pp.77-116

竹内真『図書室のバシラドール』双葉社、2020

「司書教諭」と「学校司書」の位置づけの違いや関係性については、小説のストーリーとして扱うには、複雑な面があり、「図書館担当の教員」という表現で、「現実とは違う」ということを表そうとしたのかもしれない。あくまで、フィクションの作品なので、作家の裁量の範囲ではある。

この点について、たとえば、新書版の書籍で、「『パラサイト・シングル』『格差社会』『婚活』などの言葉を世に広めたことでも知られる」（奥付の記述）山田昌弘・中央大学文学部教授が編著者となっている『「今どきの若者」のリアル』（PHP 新書）で、「一九九七年の学校図書館法改正」にふれた記述の中で、「司書教諭（司書資格を有する教師）」（p.152）と書かれているが、これは、明らかに、事実と異なっており「司書資格」と「司書教諭資格」とは、根拠とする法律も別のもの（司書資格―「図書館法」、司書教諭資格―「学校図書館法」）であり、養成課程の科目も異なっている。

山田昌弘『「今どきの若者」のリアル』PHP 研究所（PHP 新書）、2023.11

専門家の編著による著作にこのような記述が見られ、出版社の「校閲部門」でも、それが見逃されて刊行されているということは、図書館界全体が広報の責務を十分に果たせていない状況を反映している、と言えるかもしれない。

３．名取佐和子『図書室のはこぶね』実業之日本社 1)

名取佐和子は、ゲーム会社に勤務し、ゲームシナリオライターとしてゲームの制作にかかわった後、小説家としても作品を発表するようになり、本に関係した内容のものとして、『金曜日の本屋さん』シリーズ、『文庫旅館で待つ本は』などの著作もある。2)高校の学校図書館で、友人から依頼されて「図書委員の代打」として、活動することになった生徒（百瀬花音）の視点から描かれるストーリーが『図書室のはこぶね』である。体育祭を直前に控えた一週間の出来事を中心に、高校生の日常が描かれている。

野亜高校（架空の名称）の図書室は、「北校舎」「四階」にあり、「廊下側の壁沿いに、大きな本棚がいくつも並んでいた。窓側のほうには、自習や読書に使う長机が本棚と同じ向きで置かれている。カウンターの正面突き当りのカベには、「腰くらいまでしかない小さめの本棚がある」（p.5）というスペースである。

「まん丸い顔にまん丸の眼鏡をかけて、背は低く、コロコロとよく肥えた女性」と描写されている女性が、学校司書の「伊吹さん」で、図書委員の男子生徒・俵は、「『学校司書として、もう二十年以上野亜高校にいらっしゃる、いわば図書室の主だ』」と語っている。花音は、「『司書って――図書室の先生ですか？』」とたずねるが、伊吹さんは、「『司書は司書です。教師の資格はありません。学校司書とは別に司書教諭がいて、こちらは教師の資

格があり、授業も行います。今の野亜高校の司書教諭は、郡司先生ですね』」と、回答する。図書委員の俵は「『学校司書は忙しいんだよ。今は来年度の予算要求資料を作成してるところだって聞いてる』」と言っている。(pp.12-14) 司書教諭の郡司先生は、花音の担任としても、ストーリーにかかわっているが、「図書室にいたの」と聞かれ「『伊吹さんとちょっと打ち合わせしてた』『司書教諭も大変だね』」(p.41) というやりとりをしている場面もある。

ケストナー『飛ぶ教室』(光文社古典新訳文庫) が、2 冊あった (p.24) ことから、花音は、この本を借りていた人に聞きたいことがある、と伊吹さんに申し出るが、「『無理ですね。プライバシーは保護されています。学校司書であっても、そこには立ち入れません』」「『返却された本の中に一万円札が挟まっていたとしても、返却した生徒に訊くことも原則として禁止なんです』」。「『個人のプライバシーというのは、それくらい厳格に保護されているのよ』」と回答している。(pp.31-32)

一方、この高校の学校図書室のセキュリティ対策について、「パスワードを打ち込まないと、個人情報満載の書類はひらかない。図書委員はパスワードを教えてもらっていない」ので、知っているのは、司書の伊吹さんだけか、司書教諭の郡司先生も知ってるかも、と説明されている。(pp.62-63) しかし、このあと、プログラミング同好会の一年生の生徒が「『僕、はずしましょうか？』」と申し出て、わずか三分ほどで、ロック解除に成功してしまう。この生徒には「『こんなの、ハッキングのうちに入りません』」「『もっと複雑なパスワードにした方がいいと思う』」と言われてしまっている。(pp.65-66)

また、10 年ほど前のある事件を調べていくなかで、スマートフォンで調べていると、読めるのはキャッシュに残った一部分だけであり、それを、図書室にある新聞の縮刷版で調べる、というシーンがある。(pp.68-70)

学校司書と司書教諭については、学校司書の伊吹さんの発言で、「『司書は司書です。教師の資格はありません。学校司書とは別に司書教諭がいて、こちらは教師の資格があり、授業も行います。今の野亜高校の司書教諭は、郡司先生ですね』」と、別の存在であることが説明される。また、図書当番にあたっている花音に「装備」について、伊吹さんが、「『入荷した本に請求記号ラベルやバーコードラベルを付けたり、表紙に補強フィルムを貼ったりして、書架に並べられる状態にする作業のことです』」(p.155) 業務の内容を説明している場面もある。

「来年度の予算要求資料」の作成について、学校司書の伊吹さんが、司書教諭の郡司先生と打ち合わせをしているなど、学校司書と司書教諭が、協同で学校図書館の運営について対応していることを示す場面もあるが、高校生の日常生活に起きたできごとが、ストーリーの中心であり、学校図書館やその担当者について、そこまでくわしく描写されているわけではない。

注)

1)名取佐和子『図書室のはこぶね』実業之日本社、2022. 3

https://www.j-n.co.jp/books/?goods_code=978-4-408-53799-3

出版社のホームページでは、次のように紹介されている。

「10 年前に貸し出されたままだったケストナーの『飛ぶ教室』は、 なぜいま野亜高校の図書室に戻ってきたのか。体育祭を控え校内が沸き立つなか、 1 冊の本に秘められたドラマが動き出す。未来はまだ見えなくても歩みを進める高校生たちと、それぞれの人生を歩んできた卒業生たち――海の見わたせる『はこぶね』のような図書室がつなぐ〈本と人〉の物語」

名取佐和子　著者情報　実業之日本社

https://www.j-n.co.jp/writer/?writer_id=3382

2)名取佐和子『金曜日の本屋さん』角川春樹事務所（ハルキ文庫）、2016

名取佐和子『金曜日の本屋さん　夏とサイダー』角川春樹事務所（ハルキ文庫）、2017

名取佐和子『金曜日の本屋さん　秋とポタージュ』角川春樹事務所（ハルキ文庫）、2017

名取佐和子『金曜日の本屋さん　冬のバニラアイス』角川春樹事務所（ハルキ文庫）、2018

名取佐和子『文庫旅館で待つ本は』筑摩書房、2023.12

４．森谷明子『星合う夜の失せもの探し　秋葉図書館の四季』1)

森谷明子は、「図書館司書の経験を生かした」（『星合う夜の失せもの探し　秋葉図書館の四季』裏表紙カバーの記述）「秋葉図書館の四季シリーズ『れんげ野原のまんなかで』『花野に眠る　秋葉図書館の四季』」2)などの作品を刊行してきている。森谷明子は、横浜市図書館に勤務した経験があることが知られているが、図書館での勤務経験がストーリー形成に役立てられていると思われる面もある。

シリーズの三作目にあたる『星合う夜の失せもの探し』では、図書館を利用するがわの人物の視点から、図書館に持ち込まれる「日常の謎」的なストーリーに、図書館員の能勢を中心としたメンバーがかかわって、謎を解き明かしていくストーリーが、四篇、描かれている。ほかに、「春嵐」は、秋場図書館の女性図書館職員・日野を中心としたストーリーであり、最後に置かれている「人日」は、図書館開設準備室長である「田中」という、行政職から図書館に配置された人物の視点から、秋葉図書館が開設されるまでのプロセスが描かれている。

「秋庭市立秋葉図書館開設準備室長」になるにあたって、「『いいねえ、図書館勤務か。気楽だねえ』異動が決まった時に同僚にはそういわれたし、田中もそう思っていた」という。田中は、前職は学務課で様々な家庭の就学相談に対応していたし、福祉課で各種の給付金の給付資格認定等を担当していたこともあり、複雑な人間関係や金銭が絡むところには、それなりの修羅場も発生する。「本を貸していればいい図書館は、確かに気が楽だと思った」が、「すぐに悟った。楽な仕事などないと」（p.285）ということで、外部から見た、図書館の業務に対する表面的な見解はすぐに否定され、準備室長として、図書館開館まで

のストーリーが展開していく。

開館に向けての準備では、たとえば、選書会議について、「図書館は、本を貸すところなのであるから、『商売物』の選定は、何より重要である」。「田中は読書好きではあるが、あくまで肩の凝らない小説のかも今まで知らなかった」が、「この職に就いたからには、秋葉図書館の蔵書を理解するのは義務である」と考えている。(p.287)

開館を前に、市議会議員・富所さんが視察にやってくる。「市民の代表たる市会議員がチェックに来るのは当然」だが、「すでに三回抜き打ちのように現場に現れ」「鋭い指摘」をしていた。この時も、「一時間にわたって熱心に館内を視察し」て、絨毯の色について質問し、床については、「コルク張り」は単価が高いのでは、と指摘した。この件は、「児童書のコーナー」で、ほこりの害があるので「子どもたちの健康に配慮」したことを、職員が答えている。「窓が小さすぎ」るのでは、という指摘には、「図書館の蔵書は日光を当てないほうがいたみにくい」し、「北側は窓」はそれなりの大きさにしたことを回答。「窓が大きいと空調の効率が悪くなる」が、「断熱材はどの程度のものを」使っているのか、との質問は、即答できず、「後日調査の上で回答する」ということにしている。(pp.290-292)

「これだけ金をかけているくせに」「没個性」で「この図書館のイメージが全然つかめない」と、富所議員に指摘された田中は、職員の日野の勧めで、「他市の図書館に研修」に行くことになる。田中は、秋庭市に隣接する Q 市の中央図書館で実地研修を受けるが、その際、Q 市立中央図書館長から「『一つだけご忠告を。できる限り蔵書は十分にそろえておいた方がいいですよ』」と言われる。職員の日野に確認すると、「Q 市立中央図書館がリニューアルオープンした」直後、図書館から本が借りられる一方で、返却に来る人はほとんどなく、本棚ががらがらで「書架が本を配架する前の状態に戻った」ような事態になり「クレームが殺到し、市内の分館から急遽蔵書を回して」もらったことがあったことが告げられる。(pp.292-295)

そこで日野は「『館長。頑張って本を買いましょう』」というが、「資料費は底を尽きかけている」という状況（pp.295-296）で、このあと、先の富所議員の家に、所蔵されていた資料を寄贈してもらうことになる。

後に、この図書館の職員となる、「今居文子」が、「大学の三年生」で、大学の教授から、「『図書館建築の現場はなかなかないから、もしそういう機会があるならぜひ見ておくように』」と言われて、図書館建築中の現場にやってくるシーンがある。そこで、館長予定者の田中と出会い、「開館前の作業のために募集していたバイトが、まだ定員に達していない」とうことで、大学生の今居も作業にかかわる、というシーンもある。(pp.304-305)

配架作業の実際については、「田中も図書館学の初歩の初歩は教わった。秋葉図書館の蔵書はすべて NDC という分類番号を振られている」。それを「番号順に書架に並べる」が、「同じ NDC 番号の本を振られている本は多数あるから、補助番号も必要」ということで、「背表紙の三段ラベル」に記載されている「番号順に並べ」ていく。作業中、田中は職員から、「『館長、腰に気を付けてくださいね』」と言われている。(pp.306-307)

新しく開館する図書館の開館準備の様子が、館長予定者ではあるが、司書とは異なる行政職である準備室長の視点から描かれている。のちに職員となる、今居文子が、学生時代に、そうした準備作業に、得難い経験として、かかわっていたことも明かされる。こうしたストーリー展開には、実際に図書館に勤務していたという著者の経験やその当時のほかの職員との交流の中から得られた知見が、生かれていると考えられる。

注)

1)森谷明子『星合う夜の失せもの探し　秋葉図書館の四季』東京創元社、2023.7
https://www.tsogen.co.jp/np/isbn/9784488028978

出版社のホームページでは、次のように紹介されている。

「れんげ野原の中にある秋葉図書館には名探偵ばりの司書がいる。曾祖母の残した開かずの文箱、失踪したブックカフェの猫。図書館開設準備中に発覚した旧家の秘密……。そんな謎を抱える利用者を、誰もが知る古典や名作や、知る人ぞ知る本をそっと差し出して、解決までやさしく導きます」「『どこにいたの？』をテーマに描く六篇の謎。ほんわか図書館ミステリのちょっぴり番外編」

森谷明子　東京創元社
https://www.tsogen.co.jp/sp/author/874

2)森谷明子『れんげ野原のまんなかで』東京創元社（創元推理文庫）、2011←東京創元社、2005

森谷明子『花野に眠る　秋葉図書館の四季』東京創元社（創元推理文庫）、2017←東京創元社、2014

秦野市立図書館での森谷明子・講演予告では「横浜市の図書館で司書として勤務していた経験から図書館を舞台とした探偵もの」「を手懸ける」と紹介されている。

「作家が語る『読書の魅力』森谷明子さんが講演」『タウンニュース　秦野版』2020.1.31
https://www.townnews.co.jp/0610/2020/01/31/515795.html

５．櫻井とりお『虹いろ図書館　半分司書のぼくと友だち』1)

櫻井とりお、については、前号でも取り上げたが、『虹いろ図書館』シリーズ 2)は、2023 年の時点で 5 巻が刊行されており、2)『虹いろ図書館　半分司書のぼくと友だち』がその最新刊である。櫻井とりおは、図書館の勤務経験があり、本書の「奥付」のページに掲載されている「著者略歴」にも「都内区役所在職中、およそ 10 年間公立図書館で勤務」「20 年度まで非正規職員として関東圏の公立図書館に勤めた」と記載されている。

『虹いろ図書館　半分司書のぼくと友だち』は、「高校卒業して、十八歳で図書館に勤めて、丸三年がたった」という「犬上さん」を中心としたストーリーで、現在、仕事は「館内のフロアに出てもカウンターに座っててて」「接客はめちゃめちゃ苦手ながら、表面上は

何とか支障なくこなせていると、自分では思っている」が、「僕の右側、髪の生え際のおでこからひざの下までが、緑色のアザで覆われているせい」で、「長袖シャツを着ても、顔の右半分と右手の甲は隠せない」(p. 10) という設定である。通信制の大学に在籍しており「今年度から三年生」で「主な授業はネットやテレビ番組で受け」「面接授業」や「試験の時は大学」に行っている。(pp. 10－11)

本作品では、「高橋さん」という「新人といっても大卒だから、ぼくよりひとつ年上の二十二歳」(p. 7) になる男性職員との関係性がさまざまな形で扱われている。高橋さんは、大学で司書資格をとっているが、「『資格をとった瞬間に、内容全部忘れちゃいましたー』」と発言している場面もある。(p. 18)

◎児童サービス担当

犬上さんは、清見館長から、同僚の女性職員である内海さんとともに、児童担当を依頼され、「『まだ司書じゃないんですけど、問題ありませんか』」「『通信制の大学に通ってるんだよね？』」「『司書資格に必要な単位はもう全部取りました。けど、大学をちゃんと卒業しないと、正式な資格とは言えません』」3)「『うーん、犬上さんは半分司書なのかあ。中央図書館がなんて言うかな』」「『今度の新人君、高橋さんが司書持ってますよ』」という会話があり、犬上さんと女性職員の内海さん、新人男性職員の高橋さん、の「フレッシュ三人組」が児童担当となる。(pp. 22-25)

犬上さんは、児童コーナーで、高橋さんに、テーマ展示について説明し「書店と違って、図書館は同じ本を大量に仕入れることはできません」。「借りられちゃったら、別の本を探さなくちゃならない」。「展示のテーマ決めは、ふわっとさせるのがコツです」。「テーマ展示の本を選ぶのは、簡単なようですがなかなか勉強になります」と説明していたが、高橋さんは、カウンター当番だからと「無言で、階段の方へ消えていった」。(pp. 26-28)

五月には、小学校新一年生の「図書館見学と学校訪問」があり、高橋さんは、「緊張する様子も見せず」「誘導役を完璧にやり終えた」。高橋さんは「飲食のバイト」をやっていたので、「人と接する」のは「大丈夫」だという。「ブックトークや読み聞かせ」を「お遊戯みたいなこと」と言う高橋さんに、犬上さんが「『ブックトークや読み聞かせは重要な仕事です』」。「『児童担当者の一番の仕事は、子どもたちに図書館が楽しいところだって教えて、また来たい場所だと思わせることなんですから』」と言うと高橋さんは「『了解っす』」と答えた。犬上さんは、高橋さんが「お前に教えてもらうことは何もない」と思っているのではないかと考えていた。(pp. 40-43)

◎児童サービスのレファレンス

犬上さんと「二階の児童室のカウンターにいたとき」、高橋さんは「『だいたい仕事内容把握しましたから。マニュアルもあるし』」と言ってくる。犬上さんは、配架作業をしながら、高橋さんを見ていると、カウンター前に小学校低学年くらいの男の子が立って、「『ほ

つえぷろどこですか？』」。「『よくわかんない、もう一度言って』」。「『ほつえぷろ』」。高橋さんは、キーボードを叩いて検索したが、そのような本はない。おじぎをして、階段へ向かう男の子に、犬上さんは「『こんにちは』」と声をかけ、「『探しているのは、前に読んだことがある本ですか？　おはなしの本ですか？』」「『うん、おはなし、コーヒーのを……ドロボー、するの』」という会話から、《物語》の棚に案内すると、男の子は『大どろぼうホッツェンプロッツ』を引き出し、座ったまま読みだした。高橋さんは「無の表情」になり、犬上さんは「『わからないことがあれば、近くにいる職員に聞いてください』」と言って、その後は、「高橋さんにくっついてあれこれ教えるのをやめた」。(pp. 44-47)

犬上さんは、高橋さんが児童カウンターにつくとき、児童室にいて様子をうかがっていたが、「高橋さんは、大人と子どもに対する態度が違う」。「大人の相談を受けるときは、愛想よく敬語で受け答え」していて、「周りの人にもよく聞いて判断している」。「相手が子どもだと手を抜きがち」に見えた。「小学校高学年くらいの女の子」が、カウンターで高橋さんに「『図書館に前の新聞があるって聞いたんですけど、どこで読めますか？』」と聞いていた。サッカー大会の記事が見たいということだが、何新聞かはわからない、大会やチームの名前もわからない、と言われ、高橋さんは「『それじゃあ、無理だよ。わかんない』」と決めつけた。犬上さんは、それまで書架の陰から見ていたが、そこから飛び出て、「『こんにちは。その記事のことで、わかることを教えてくれますか？　調べてみます』」と話しかけた。今年開かれた、小学生の大会らしいということで、「大手新聞の記事を集めたデータベース」を調べたが「どれもピンと来ていない」ようだ。犬上さんは、業界でいう「レファレンス・インタビューをやりなおす」ことにして、「角度を変えた質問」をする。「『あなたの知ってる人が出ているんですか？』」と」聞くと、三月に転校した友だちが出ている、と言う。この女の子は、記事は読んでいないがクラスの別の子が教えてくれた、とのことで、内海さんは、データベースや縮刷版がないくらいの「ローカルな新聞」ではないかと言う。その新聞は、この図書館にはないが、本紙は中央図書館にある。さらに別の職員が「新聞に挟まって各家庭に配布」される「月二回出ている」「市のおたより的な」「市の広報紙」に出ているのではないかと思いつき、これはその図書館にあったので、最新号から見ていくと、それにサッカーチームの写真が載っていた。これが「『あなたのおともだち？』」と聞くと、「女の子は真っ赤な顔で何度もうなずいた」。これは、まだ実物の配布分がある、ということで、広報紙をかかえて女の子は帰っていった。(pp. 48-53)

犬上さんは、高橋さんと「『子供が嫌いなんですか？』」。「『ぶっちゃけ子供の質問って答える必要あります？　自分で調べなきゃ、学力につながらないすよね？』『あのサッカー大会の記事なんか、あんなの正規の公務員が何人も、なん十分もかけて調べてやる価値あります？　結局、あの女の子が広報紙一部もらって喜んだだけじゃないすか。税金というコストをかけてまで、やるべき仕事すかね？』」。「『それが、図書館の仕事なんです』『利用者の調べ物の手伝いをするのは、司書の大事な仕事ですよね？　利用者が子どもだとか大人だとか、調査目的の価値とか、僕らが判断すべきでしょうか？　図書館は教育機関です。

えと、それ以前に公的機関です。コストって……』」。「『公的機関だからこそ、限られた財源を最大限に生かす努力が必要だと思いますけどね。そもそも図書館のレファレンスなんて、ネットでたいがい解決できますよ。市民のITリテラシーとか、システムやデバイスのインターフェイスを整えれば済む話っす』」といったやりとりをしている。(pp.58－59)

夏休みの終わり近く、「読書感想文」の宿題を思い出した、小学校五年生の男の子に、カウンターで、学校のおすすめ本のリクエストを依頼された高橋さんは、「今、予約が二十四人も」いることを伝え、「本が用意できるのは」十月ぐらいになると言う。犬上さんはその子に話しかけ「読書感想文なら、図書館でもおすすめの本がある」と言って、プリントで指定された本でなくてもいいので、図書館にある「五、六年生向けの本」から選んだらどうかと提案する。その子のTシャツに「海外のサッカーチームのロゴ」がついていたことから、サッカーに興味があると考え、有名なサッカー選手について書かれた本を紹介すると、男の子はその本を借りていった。(pp.152-154)

◎高橋さんの考えが変化する

配属から数か月経過して、高橋さんは、犬上さんに「『正直な話、四月のころ絶望してた』『図書館なんかに配属されて』『そもそも、自分は図書館の仕事が理解できなかった』『レファレンスひとつとっても、今はネットがある』『単にリテラシーのない人間を手助けするのが自分の仕事なのか』『子どもや年寄りの愚にもつかない思い付きを、わざわざ公費で雇われている自分らが、コストと時価を割いて調べてやるべきなのか』」と言ってきた。犬上さんは、「こういう考えって、世間には多いらしい。児童や高齢者相手のサービスを下に」見て、「現代においてビジネス支援は重要」みたいなことも言う人がいるようだと考える。高橋さんは、さらに、「『児童担当者は所蔵の絵本全部読め』って言われ」たが、「市の職員は早いと」三年で異動するから、そんな知識他の部署では必要ない。司書資格があると十年図書館にいられるから、自分はここで十年飼い殺し、かとも思い、「四月の自分は絶望してた」。「図書館なんて単なる無料貸本屋」。「じーさんばーさんのヒマつぶし所」で、「苦労して大学出て、公務員試験受かったのに、自自分はここで何をするんだろう」と「かなり絶望」してた、ということだった。犬上さんは、高橋さんが、「司書資格をとって」るし、「図書館の意義や役割」について「授業で教わったはず」と問いかけるが、高橋さんは、「資格は司書だけじゃな」く、教員免許、簿記、英検、TOEIC、秘書検定、MOS、なども「履歴書にたくさん書ける」方がいいと、とりまくったので、細かいことは覚えていない、と言う。その後「『数か月働いてやっと、図書館は立派な行政の最前線だって気がつきました』」。赤ちゃんから高齢者まで利用していて、「仕事は多岐にわた」り、「図書館が単なる無料貸本屋じゃないってことは理解したつもり」だと言う。

犬上さんは、「情報はネットで調べればいいだろって話をよく聞く。でもネットの情報」は、直接の体験以外「本からの引用やそれらを利用して作られた情報」であり、「新しい本を書くのだって、昔の資料からの情報が必要」だ。「昔の本」や「書籍以外の行政資料や郷

土資料」は「公共図書館がなければ手に入れにくい」と言う。高橋さんは、「必要な本や資料を全部、自分の金で探して買うわけにもいかない。もしそうだとしたら、大金持ちしか情報発信や勉強ができなくなる」と言うと、犬上さんは、「どんな資料が何の役に立つのかは、誰にもわからない」から「図書館は役割分担をして、資料を幅広く収集し大切に保存し続ける」。それはみんなの財産で、「子どもでも高齢者でも外国人でも、誰もが自由に何かを判断した、調べたり、気が付いたり、じっくりものを考えたりできるようにするために、図書館はある」と言ったのに対して、高橋さんは、高校まで「公共図書館といえば自習室ぐらいしか使ってなくて」「もったいなかった」。「最近やっと気が付きました」。でも、「自分が直接図書館を利用してなくても」「今あるこの世界は図書館なしには成立しない」と言っている。

上記で紹介した、ふたりの対話の部分は、現代における公共図書館の存在意義について、作者である櫻井とりおが、図書館での勤務経験とそのあとの作家活動を経て、たどりついた現時点の心境が吐露されているかのように感じられる。

このほかにも、本作では、子どもだけで図書館を利用する利用者に慎重な対応が求められることや、各種の図書館行事への対応などを通じた、犬上さん、高橋さん、内海さんをはじめとした職員間の交流の様子などが、描かれている。

注)

1)櫻井とりお『虹いろ図書館　半分司書のぼくと友だち』河出書房新社、2023.11

最新刊の本書について、出版社のホームページでは、以下のように紹介されている。

https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309031569/

「図書館に勤め始めてから4回目の春。犬上さんの悩みは反抗的な新人・高橋さんのこと。さらに同僚・内海さんとの関係にも変化が――」「大人気図書館シリーズ、お仕事も恋も波乱の第5弾」「苦手な後輩と気になる同僚　半分司書の青春は、今日も大変！　大人気シリーズ・イヌガミさん編、恋？と友情？の第2弾！」「図書館に勤め始めてから4回目の春。自動担当として奮闘する犬上さんの目下の悩みは、年上の新人高橋さんのこと。反抗的で、司書の仕事にも熱心じゃないみたい。さらにとある事件以降、同僚・内海さんのことが気になってしかたなくて――」「人生に必要なもの、それは、図書館と、本と、素敵な――？」

櫻井とりお　河出書房新社

https://www.kawade.co.jp/np/search_result.html?writer_id=00417

2)櫻井とりお『虹いろ図書館のへびおとこ』河出書房新社、2019

櫻井とりお『虹いろ図書館のひなとゆん』河出書房新社、2020

櫻井とりお『虹いろ図書館のかいじゅうたち』河出書房新社、2021

櫻井とりお『虹いろ図書館　司書先輩と見習いのぼく』河出書房新社、2022

これらの作品には、以下でふれた。

佐藤毅彦「2021年　コロナウイルスの拡散が継続する中での図書館状況と図書館小説」

『甲南国文』vol.69、2022.3、pp.48-80
https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/69/sato2022.pdf
佐藤毅彦「図書館をめぐるメディア状況の現在地―2022 年の実情について」『甲南国文』vol.70、2023.3、pp.49-74
https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/70/sato2023.pdf
3) 図書館法　第五条（司書及び司書補の資格）では、「大学を卒業したもの（中略）で大学において文部科学省令で定める図書館に関する科目を履修したもの」とされている。

６．原田ひ香『図書館のお夜食』1)

原田ひ香、は、ラジオドラマなどを手がけたのち、小説を発表してきているが、多数の著作の中には、『古本食堂』など図書に関係したものがあるほか、さまざまな料理について、小説の中でふれていることも、この著者の特徴のひとつとなっている。2)『図書館のお夜食』の舞台となるのは、「東京の郊外」（p. 7）にある、「入館料　一〇〇〇円」で、月間パスポート、年間パスポート、もある図書館。（p. 10）以前は無料だったが、「万引きや窃盗が横行」したため「チケット代は」「変な奴を追っ払うためのもの」で、「本当に来たい人だけ来てもらえばいい」（p. 12）という設定になっている。この図書館で働くことになる、「樋口乙葉」の視点から書かれたエピソードが最初に置かれ、以下、ほかの職員をメインとするストーリーが展開していく。

この図書館のオーナーによれば、「夜の図書館」というように「夜七時から夜中の十二時まで」開館していて「勤務は午後四時から深夜一時まで」。「すでに亡くなった作家の蔵書」が置いてあり、「作家さんが亡くなった後寄付して頂いて、こちらに展示、整理するのがうちの図書館の主な業務」で、それを鑑賞してもらう。基本的に貸し出しはしていないので、「図書館という名前ですが、実質は本の博物館」かもしれない、という。（p. 20）

運営については、冒頭で樋口乙葉を案内する男性の職員から、バブルの頃に金持ちが趣味で建てた図書館を安く買い取り、作家の蔵書を引き取ってオーナーひとりで整理していたが、蔵書が盗まれた事件がニュースで報道され、それで寄贈してくれる作家や家族が増えて、「財産の一部を残してくれる方」がいたり、「国の方からも文化財保護のため、補助金が下りるように」なった、ということが語られている。（pp. 85-86）

◎樋口乙葉

第一話から、第二話、第三話、第四話、最終話、まで、それぞれ、現在、この図書館で仕事をしている職員のひとりに、焦点を当てたストーリーになっているが、冒頭では、「樋口乙葉」という、東北地方の駅ビルの中の書店に勤務していた女性の視点から物語が展開する（p. 17）。この女性は、「本に関する仕事に就きたい」と思い「大学では国文学を専攻」して、「国語の教員と書道教諭の免許」を取得した。図書館員の資格は取りたかったが、ア

ルバイトなどがあり手が回らなかったという。「地元の教員採用試験に落ち」「出版社、取次会社、大手書店」など「『本に関する仕事』の就職活動をした」が、落ちてしまった。大学から紹介されたメーカーに内定したが、それを蹴って「地元に戻り、契約社員の書店員」になる。「駅ビルの中の書店の仕事は楽しかったけど、だんだん身も心も疲弊してしまった」。「サービス残業は当たり前」で、「給料が低すぎ」「四十代半ばの男性店長とそりが合わなかった」。SNS に書店員として投稿したことがきっかけで、ダイレクトメッセージでこの図書館のオーナーから受け取り、図書館の仕事に、勧誘される。（pp. 18－19）東京郊外の小さな図書館で、給料は手取り十五万、と、「いいとはいえないが」「図書館の裏に寮」がある、など「条件は悪くない」と考え、Zoom での面接を経て、採用される。（pp. 20-22）

樋口乙葉は、司書資格は取得しておらず、図書館勤務経験もなく、「契約職員の書店員」という立場から、この図書館に勤務するようになったが、この後のストーリーでは、図書館の勤務経験のある二人の女性が、この図書館に転職してきていることが明らかにされる。乙葉は、「本に関する仕事」に就きたいと思って、関連のありそうな資格（「国語の教員と書道教諭の免許」）を取ったが、それを生かした職には就けず、ほかの仕事の正規雇用を断って、契約職員の書店員になるが、待遇や職場の人間関係に疲弊していた乙葉は、この「夜の図書館」の面接を受けて雇用されている。待遇がそれほどいいわけではないが、東京郊外で寮もあり、地方の書店の契約職員に比べれば、救いがある状況、ということか。

◎榎田みなみ

樋口乙葉からみて「少し年上くらいの、同年代」の女性（p. 14）が「榎田みなみ」である。みなみは、「自分が、本やそれに関する仕事がそう好きではないのかな、と思う」ときがある。彼女は、「子供の頃はおとなしい子」であり、「何事も不器用で、運動神経が悪く」「怪我しないようにするには家の中でじっと本を読んでいるくらいしかなかった」。両親も「本が好きな人」で、「『みなみは本が好きなのね』『みなみは国語が得意なのね』『みなみは学校の先生か図書館の先生になるといいわ』」と言われて「大学の英文科に通い、図書館司書と教員の資格を取った」。学校の先生にはなりたくなかったが、「東京の中堅大学を卒業しても、図書館司書の仕事なんてそうはなかった」。「結局、地元の公立図書館のアルバイトに応募」し、「三ヶ月の期限付き」で、「市内には図書館が地域ごとに点在」していて、「それを三ヶ月ごとに点々とする」。「同じことをしている人が何人かいて、それで、なんとかその市の図書館は持っているのだけれど、誰もそれを是正しようとはしない」。面接では、「図書館司書ではなくアルバイトとしての採用ですがいいですか」と聞かれるが、「専門職としてではなく、誰でもできる仕事として雇われるのだ。他には募集がないのだから否も応もなかった」。「最低賃金の時給」で、「月に働ける日数や時間が決まっており、そのほかはサービス残業」になり、「年金や健康保険料を引かれると月十二万くらいが毎月振り込まれる」。「家に三万入れて、少しは好きなものも買えて貯金もできる」し、「親も『娘は市の図書館で働いています』というのは、悪くなかったらしい」という状況にあった。

（pp. 92-93）

みなみは「地方の図書館司書、非常勤です。というプロフィールでSNS をやってい」て、ある時「自分の置かれている境遇について書いた」。「自嘲気味に書いた文章だったのに、それは瞬く間に広がった。大学出の図書館司書と教員免許を持っている『知的な女性』がこのような境遇に置かれていることは日本の根本的な構造問題ではないか……とインフルエンサーの男性に引用リツイートされて、さらに広まった」。「そこまで何かを訴えたくて書いた文章でもなく、みなみ自身がかなり戸惑った」が「二日ほどで鎮火し」「ほとんど話題にならなくなった」。「ほっとしていたところに送られてきたDMがここへの誘いだった」。「本に関する仕事を紹介」するメッセージに「みなみが魅かれたのは、図書館の仕事という内容でも、作家の蔵書を集めているという特異性でもなく、その待遇だった」。「給料も今より三万も高いし、無料の寮が付いている」。「親の『結婚しろ』という声がうるさくなってきて」「一人暮らしをしてみたかった」という「消極的な理由で、みなみはここに来た」（pp. 92-95）という。しかし、みなみは、「この図書館で働いている他の人と、自分はまるで違う」と感じていた。（p. 95）

「図書館の公式問い合わせメールアドレス」に質問が来ていて、それは、ある作家の蔵書の内容について、医療関係の専門書があればその目録を作成してほしい、というもので、「ここは公立図書館でもないし、自分はボランティアでもない」。「なんで、見知らぬ研究家に」「メール一本で目録まで作って送らなきゃならないのか」。「リファレンスが図書館司書の大きな仕事に一つだということはわかっているが、ここでそこまでやってやる必要があるのか」。「しかし、無視もできない」と、みなみは、この作家の蔵書一覧をメールに添付して送り返した。「こういう時に、みなみは自分が、本やそれに関する仕事がそう好きではないのかな、と思う」（pp. 90-92）

みなみは「ここは働きやす」く、「仕事はのんびりしていて、優しい人ばかり」だが「わがままな利用者のメールに返事を書いていると、自分の本性が現れてしまって怖い」。「この図書館で働いている他の人と、自分はまるで違う」。みなみは「実は仕事上必要なものくらいしか読まないし勉強しない。ただ、必要なものが多いから、読書家に見えているだけ」「いつか自分の化けの皮がはがれるんじゃないか」と「いつもおびえている」。（p. 95）

図書館司書の資格があっても、正規雇用の採用が少ないことは、現在ではよく知られるようになってきていると思われるが、この榎田みなみは、はじめから、自分が図書館で仕事をすることを強く意識していたわけではない。両親に勧められたこともあってこともあって、教員や司書の資格を取ったが、学校の先生になることには積極的になれず、図書館司書については、アルバイトの採用しかない。契約で、三か月ごとにほかの図書館にうつること繰り返していて、それを SNS で書くと、思いがけず、話題になってしまう。結局、それも覚悟があってやったことではなく、沈静化してほっとしているところへ、「本に関する仕事」として「夜の図書館」を DM で紹介され、待遇面にひかれて転職する。現在の職場には、ある程度満足しているが、実際に図書館での業務をしていく中では苛立ちを感じ

ることもあり、それでこの図書館のほかの人たちとは違うのかも、と感じている。

◎正子さん

「夜の図書室」の中には、蔵書の整理を扱う部屋があり、そこで作業をしている「二人の年配女性」のうちの一人が「正子さん」と言われている人物である。（pp.22-23）もう一人の女性「亜子さん」は、「静岡の駅前の小さな書店の店員」をしていたが、その亜子さんによれば、「正子さん」は「大きな図書館の図書館員だった」という。（p.108）ほかの職員には、「パソコンがない時代から図書館司書をしていた人」（p.105）ともいわれている。

この「正子さん」は、「東京の下町」に生まれ「短期大学」に行って「図書館司書の資格を取って、試験を受け就職」した。「正子がいたのは東京都内の公立図書館だった。きちんと都の職員として採用された」が「やはり『腰掛け』というようなイメージで、正子自身もまわりも、数年……遅くとも三十になるまでには、結婚して退職するのだ、という気持ちで勤めていた」。（p.137）その後、両親が離婚し、妹を短大にやって嫁がせるうち「気がついたら自分の婚期を逃していた」。「正子が働いていたのは、中心的な役割を担う図書館だった。就職当時はまだコンピューターは導入されず、紙のカードで本は整理され分類されていた」。「正子が配属され、人生のほとんどを過ごし、最後に主任まで務めたのは『相談係』……つまりリファレンスの係だった」。「一番多い時には常時二十名の職員が配属されていて、朝から晩まで、利用者の質問に答えるのが、その仕事だった。窓口と電話というのが当時の主な手段だった」。「それはまさに現代のグーグルで、今だった簡単に『ググれよ』と言われるようなことが図書館に大量に持ち込まれていた」。「一九八〇年代半ばからはポツポツとコンピューター・システムが入り、デジタルで情報を処理し始めたが、正子が働き盛りの頃はその過渡期で、図書カードとパソコンを両方操って情報の海を泳いだ」。「必死で働いたし、必死に覚えたし、必死に本を読んだ」。「やっとゆっくり本が読める、じっくり自分のために読める、と思った時……正子は読書を失っていた」（pp.139-140）と、彼女は、「本が読めない」（p.135）状況になってしまう。「図書館退職間際」に「『２ちゃんねる』の図書館に関するスレッドに」「自分は本が読めなくなっていること、自分のようなものが図書館の仕事に携わっていいものか迷っていること、そして、今後の人生が不安なこと」を書いたもの対して、返事が書き込まれ、「あなたのような方に手伝っていただきたい仕事があります」。「よろしければ、ご連絡いただけないでしょうか」とのメールに返事をして、「スカイプで面接を受け」て、ここでの仕事についた。（p.145）

◎「夜の図書館」の女性職員

ほかの職員については、古本屋と関連のある男性なども描かれているが、ストーリーに登場する三人の女性については、この「夜の図書館」に転職してくる前は、大学を卒業して数年間の職業経験がある女性ふたり、書店の契約職員（樋口乙葉）、公立図書館のアルバイト（榎田みなみ）、と、都立図書館に長年勤めて退職した年配の女性（正子さん）、とい

う設定になっている。若手の二人は、教員の資格も取っているが、結局、教員にはならず、ほかの仕事を断って、書店で契約職員をしていたものの人間関係などで行き詰まりを感じていた樋口乙葉と、司書資格を取ったものの正規職員にはなれず、アルバイトで図書館を転々としているうちに、年数がたってしまっていた、榎田みなみ、である。年配の女性である正子さんは、短期大学を卒業して、試験を受けて採用され、都立図書館の正規職員として、図書館の業務ではリファレンスを担当し、メディアの変化にも対応してきたが、退職間際に、本が読めない状態になってしまっていた。彼女は、たとえば、「前の図書館で、インターネットに関わったのよ。普通の人より、パソコンに触ったのはわりと早いほうよ」（p. 147）と語っている場面もある。図書館を取り巻く環境の変化の影響か、この図書館のオーナーとの面接に、正子さんは、「スカイプ」だが、樋口乙葉は「Zoom」が、使われている。

「夜の図書館」にしても、給料は、手取り十五万、と必ずしも、好待遇というわけではが、「東京の郊外」（p.7）でも寮があるので、住居のための経費は軽減される。この図書館は、「作家の蔵書」を「亡くなった後寄付」してもらって「展示、整理」している、というある意味では、文学に関する「専門図書館」的な施設であり、オーナーの発言でも「実質は本の博物館かもしれません」と言っている。（p.20）本節でとりあげた、三人の女性職員は、それぞれの置かれた状況で活動していたが、日常の業務で疲弊したり、燃え尽き症候群的な状態になっていることを、SNS に書き込み、その内容をみたこの図書館のオーナーに注目され、面接を経て、図書館に採用される。あまり希望が持てないような日常から、この図書館に移ってきて、救われた感じになっており、その救済の場となっているのは、オーナーが存在し、入館は有料の「私立の」図書館である。司書資格は取らなかったが、樋口乙葉は、「私がずっと夢見ていた図書館に近い」と言っている。（p. 13）

注）

1）原田ひ香『図書館のお夜食』ポプラ社、2023. 6

https://www.poplar.co.jp/book/search/result/archive/8008428.html

出版社のホームページでは、以下のように紹介されている。

「東北の書店に勤めるもののうまく行かず、書店の仕事を辞めようかと思っていた樋口乙葉は、SNS で知った、東京の郊外にある「夜の図書館」で働くことになる。そこは普通の図書館と異なり、開館時間が夕方７時～12 時までで、そして亡くなった作家の蔵書が集められた、いわば本の博物館のような図書館だった。乙葉は「夜の図書館」で予想外の事件に遭遇しながら、「働くこと」について考えていく。」「すべてをさらけださなくてもいい。ちょうどよい距離感で、美味しいご飯を食べながら、語り合いたい夜がある。」

原田ひ香　著者プロフィール　新潮社

https://www.shinchosha.co.jp/writer/5749/

2）原田ひ香『古本食堂』角川春樹事務所（ハルキ文庫）、2023. 9←角川春樹事務所、2022

７．おわりに

阪急阪神不動産が手がける、阪急十三駅周辺の複合開発プロジェクトの中核施設「ジオタワー大阪十三」に、図書館が設置されることが、この施設のホームページで明らかにされている。2 階のフロアに、大阪市立図書館の分館や、まちライブラリー（学校図書館一般開放エリア）、学校図書館（学校専用エリア）、などの開設が予定されているという。1)一方、神戸市立三宮図書館は、現在はメリケン波止場近くの「KIITO」2 階に開設されているが、数年後には、JR・阪急・阪神三ノ宮駅近くに建設される、新たな複合施設に入居する予定であることが発表されている。2)また、京阪枚方市駅前の再開発事業でも、新たに設置される複合施設 5 階の部分に、枚方市立図書館の枚方市駅前図書館が、開設されるプランが発表されている。3)

こうした事例にみられるように、近年、図書館が大規模再開発施設内に入居する事例が、一定数、出現するようになっており、ショッピングモールを扱った本の中で、図書館が取り上げられているケースもある。4)閉業したモールでの例として「都城市立図書館」が、「元モールをリノベーションした施設」であり、「モールの居抜き」で、「レイアウトの自由がきく大空間という、モールが持っている特徴が」「公共施設に転用しやすかった」。「都城市立図書館は吹き抜けを生かした読書空間のデザインが見事で、モールの底力を感じる」と評されている。

多様な展開を見せる現実の図書館施設に対して、フィクションの作品では、たとえば、赤川次郎は、『幽霊列車』で、デビューしたのち、『セーラー服と機関銃』や『三毛猫ホームズ』シリーズなど、多数の著作を発表してきた作家であるが、2023 年 12 月に刊行された、最新作『余白の迷路』には、図書館が登場する。5)赤川次郎は 1948 年生まれで、70 代後半に差しかかっている。これまでに多数の小説を刊行してきている作家が、現代において、新作の小説に自らの年齢に近い人物を登場させ、「三木忠志は今、七十歳」（p. 10）という設定で、冒頭には図書館を利用するシーンが描かれている。

2023 年 7 月に、日本図書館情報学会が編者となっている、『図書館情報学事典』が刊行された。6)全体が 10 部門から構成され、さまざまな面から図書館に関係するテーマが扱われているが、巻末におかれた「10 部門　図書館の世界」の末尾の部分では「４章　物語としての図書館」として、フィクションの中で描かれた図書館について分析されている。こうした領域の研究についても、学会の中で一定の関心が払われるようになってきている、ということか。

月刊誌『ダ・ヴィンチ』2024 年 1 月号は、巻頭に「特集」として「あなたが選ぶ、今年最も心に残った一冊は？」「BOOK OF THE YEAR 2023」を掲載している。7)小説のランキング TOP30 に続いて、「コミックランキング TOP30」で、10 位に『税金で買った本』がランクインしており、原作者・ずいの、に対するインタビューが掲載されている。

8)「自身の図書館勤務経験を踏まえ、この作品が生まれたのはよく知られている」という導入部に続いて、「図書館業務のリアルも、本作の面白さ」というインタビュアーのコメントに対して、「『図書館を実際に運営する上ではさまざまな問題があって、その現実的なところを私は描きたいと思いました』」とし、「今後描きたいこと」には、「『図書館は経済的・社会的格差にかかわらず、誰でも知識に触れられる場所です。そういう図書館の役割も意識的に描きたいですね』」と述べている。

出版界の全体状況の中では、現実に日本の政治や宗教活動の領域で一定の影響力を有し、2023 年に逝去した「池田大作」を扱っている最新刊の図書『民衆こそ王者　池田大作とその時代 19　知性の武器庫―図書館篇』では、この人物と創価大学図書館との関連が扱われている。

フィクションの中で図書館を扱った事例については、今回取り上げた作品のように、同じ作家が、移動図書館の担当者に続いて、学校図書館の職員を主要なキャラクタとして扱ったり（『本バスめぐりん。』『めぐりんと私。』、『27000 冊ガーデン』）、シリーズ化されて続編が刊行されたり（『秋葉図書館』シリーズ、『虹いろ図書館』シリーズ）、長期にわたって継続してコミック作品が連載される（『税金で買った本』）などの例が、出現している。そうした作品の動向について、現実の図書館状況を視野に入れながら、今後も継続して取り上げ、考察していきたいと考えている。

注）

1)「ジオタワー大阪十三」

https://geo.8984.jp/mansion/osaka13/development/

２F 部分のイラストには、「多世代の交流がはじまる。出会いをつなぐライブラリー。」という紹介文の下に、「大阪市立図書館」「まちライブラリー（学校図書館一般開放エリア）」「学校図書館（学校専用エリア）」などの開設が予定されていることが示されている。

また、下記の紹介記事では、

『PR TIMES』「集合住宅、図書館、保育・学童、商業、学校等からなる複合開発」

https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000262.000033147.html

「今後の発展が期待される十三で、集合住宅、図書館、保育・学童、商業、学校等の複合開発。超高層タワーレジデンス総７１２戸。『ジオタワー大阪十三』始動」と記されている。

2)「【神戸市】『三宮図書館』が海側の『KIITO』へ期間限定で移転　昭和レトロな趣に　謎解きイベントも」『ラジオ関西トピックス　ラジトピ』2022.7.31

https://jocr.jp/raditopi/2022/07/31/444746/

「今後、2027（令和 9）年度完成予定の「雲井通 5 丁目地区再開発ビル」に移転するまでの間、KIITO 内でサービスを行う」とされている。

3)「枚方市立市駅前図書館について」枚方市、2024.1.18

https://www.city.hirakata.osaka.jp/0000049379.html

「枚方市駅周辺再整備事業の実施に伴い、令和 6 年度を目途に、枚方市駅東側に現在建設中の商業施設、宿泊施設、住宅、行政施設等を含めた市駅直結の利便性の高いビル『ステーションヒル枚方』の 5 階に枚方市立市駅前図書館を開設します」とされている。

4)大山顕「第一節　モールは『街』である」

大山顕監修・編『モールの想像力　ショッピングモールはユートピアか』本の雑誌社、2023.8、p.43

5)赤川次郎『余白の迷路』角川書店、2023.12

巻末の奥付では、「1948 年、福岡県生まれ。76 年『幽霊列車』で第 15 回オール讀物推理小説新人賞を受賞しデビュー。作品が映画化されるなど、続々とベストセラーを刊行」「『セーラー服と機関銃』」「『三毛猫ホームズ』シリーズなど」「著作は 600 冊以上にも及ぶ。2005 年秋に、角川文庫の赤川作品の総部数が 1 億冊を突破」などと紹介されている。

6)日本図書館情報学会『図書館情報学事典』丸善出版、2023.7、pp.642-653

「図書館の世界」の記述は、小説と映像作品とに分かれているが、「図書館をテーマとする文学」では、『薔薇の名前』『図書館警察』『愛のゆくえ』『海辺のカフカ』『図書館戦争』『おさがしの本は』、「図書館をテーマとする映像作品」では、『格子なき図書館』『ある日どこかで』『ショーシャンクの空に』『耳をすませば』『パーティーガール』『ニューヨーク公共図書館　エクス・リブリス』が扱われている。いずれも、よく知られたものが取り上げられている。日本と海外の双方の作品がとりあげられ、時代的にも多岐にわたっているが、各項目の執筆者がそれぞれ異なっており、個別の作品のエピソードについてそれぞれの執筆者がふれている、という印象で、全体的な歴史的動向や、海外のものと国内の作品との、図書館の扱われ方の違いなどについては、事典の記述内容を参照しただけでは把握しがたい部分もある。

7)「あなたが選ぶ、今年最も心に残った一冊は？」「BOOK　OF　THE　YEAR　２０２３」『ダ・ヴィンチ』2024.1

8)松井美緒：取材・文「注目作家インタビュー　ずいの（原作）『税金で買った本』」『ダ・ヴィンチ』2024.1、p.46

原作・ずいの、作画・系山冏『税金で買った本』講談社、は、2024 年 1 月の時点で、コミックの単行本が、第 1 巻～第 10 巻、まで刊行されている。

9)「池田大作とその時代」編集委員会『民衆こそ王者　池田大作とその時代 19　知性の武器庫―図書館篇』潮出版社、2024.1

「図書館は、独善や無知と戦う『知性の武器庫』である」（p.56）という、『聖教新聞』2002.7.21、に掲載された発言が引用されている。

（本文中で参照したｗｅｂページは、2024 年 1 月の時点で公開されていたものです。